

# 宮古島の葬制用語の解説と研究

岡本 恵 昭 (平良市総合博物館協議会会長)

## はじめに

宮古島に於ける葬送風俗とその共同管理体制のくずれは、時代の情報化に依る変容と他界観念、死生観念の変化に伴い著しいものがある。そこで、民俗の中から共同体の中で育てられた風俗の語彙を分類解説をしてみたい。

共同体(村落)が受容するユイマール精神は、一人の死の予兆からその家族にかかわる靈魂の協議供養に至るまで、いわゆる非日常性、ブソーズ性の風俗化まで受容しながら対等の関係を保持していく、つまり、“シウコウツキアイ” = “ウトザ(親戚)ヤーキ、ツキアイ”に至るまで続けられる。ここに忘れ去らんとする葬式の風俗用語を解釈して、古き姿より“人の死”とその処理過程を考えてみた。人の一生に必ずある現実の死をどのように考えていくかを理解するステップとしたい。

## 1. 葬制のあらまし～村の風俗から

### (1) 島尻の葬式について一通過儀礼として

死の儀礼は、死という不幸なる人生最後の通過すべき儀式である。男は死んでもその主座をはなれず、一番座より玄関を通して出棺させる。死者はウラザ(裏座)でバツミ水をする(水だけ使用、湯は入れない)。最初に生れ井の水を汲んで、親族のトイ(干支)のカド(生まれ干支)にあたる人が水をかける。その後子供達が、次いで親族が次々と沐浴させる。死体には、3枚ないし5枚の着物をうら返しにして左あわせで着させ、持ち物の着物で最も上等の晴れ姿をさせる。爪や髪を切り包んでバタフクル(フトコロ)に入れる。女は髪をといて整え、油をつけてギーパをさす。女にも晴れ着の上に白い後世着(グソーキン・カンパニ)を必ずつけさせる。手は合掌させ、ひざはヒモ(ウリグス)で縛り、タビをはかせ(大正時代)、顔には真白いサズをかぶせる。直系の子供達がパク(棺)に入れる。ツカには、ムッスや木マッフア(マクラ)などが敷かれそこに寝棺させて真新しい下着数枚、サズ(手布)、タバコ、キセル、マッチ、着物、下着、ボウシ等身の回りの品々を入れる。「ピドミ」と呼ばれる。米(ユニ)、粟(アー)、麦(ムズ)のムヌダニを爪と共に死者の左胸に入れてやる。針(ピス)を3本洋服にさして持たす。ピドミ(ツト)はあの世のみやげ品で、血縁のある人が必ず一にぎりの穀物を紙やユナ葉に包み真苧(ブー)で結んで持たした。

これは生き死にの別れの供物といわれるみやげ品である。男は上座に西枕をして寝棺させアダナス縄でくる。女は二番座に置いて、一番座に頭を向けて読経させる。枕飯（フッチャームイ・一膳飯）は、四つ物と呼び少量のフッチャームイ（盛飯）とソーメンの汁、ウサイムノ（おかず）、漬物がそれぞれ四つの碗に盛られて、ウミス（箸）を立てる。四ツブン（四つ膳）はヤスクボンと呼び四角の木盆である。花米や酒、塩や茶湯が備えられて、枕元の香炉に香がたかれる。出棺は、読経の後で、男は玄関（一番座）から女は二番座から出す。（戸主のみを一番座から出す場合が多い。）葬制は名期を先頭に四流の法印の旗赤、白、黄、青、灯明二本、花、前枕、ガン、遺族、長男親族組の人々、里の人々とつづき、女子は道の途中で泣き別れをする。出棺の時女達は号泣する。出棺がすむまで止むことはない。ガンは2人でかつぎ交代することをきらう。

墓の前庭でガンを降ろして納棺の法事が終ると、墓の入口にふさがった石をトイが取り去って口を開ける。棺を入れ、身の回り品を入れグシャン（杖）3本～5本、カサ1本、ボン1個、ジンユースニギリ二皿をツカの前で供える。墓口をしめ、最後のわかれとして墓口に水をまき香をたく。帰宅の時、墓口に入った時人々はアダン葉の三本で作ったウギヤ（三ヌウギヤ）を作り、左まわりで三回頭上にまわしておく。これらを参列者の人々も行う。この魔よけが終了したあと、後をみないで小走り帰宅する。途中海におりて手足を洗う。その後門の前に出された塩水で手足と胸に手で水かける。そして、まっすぐにフル（便所）に行き家畜である豚を泣かす。その後二番座から入口に入る。門前には、ギスキのミイマータヌウギヤなどや棒などで門を封じている。魔よけである。しかし、出産時はフルに行くことをさける。行くとヤクにあたって、子豚が死ぬという。アダンで作ったミイマータウギヤは現行していないが、棺の内部や墓内の魔よけとしてたまたま利用している。

## (2) 砂川村の野辺送り

葬式は潮が満ちる頃に行う。友引きの日に葬式する時は雛一羽を墓庭のマイジクヤー（前机屋）の前に放つ。もし雛が無ければバッタ（カタ・ウントラガタ）や人形・トリの形をしたおもちゃでもよい。この日の葬式には死者が自分のお伴に、生きた人をあの世に連れて行くと言われる。これを防ぐため人の代用に放った雛が孵化し、この親子が喪家に来ると、その家は繁盛するといわれている。

入棺前にスニグイ・カングイ（神声）と称して、カンカカリヤ（ユタの意。ユタには葬式に関する事を主にやる者と、それ以外の信仰にたずさわる者がいる）を招き、死者が生前に考えていた事、言い残した事を「ンミヌバン」としてカンカカリヤを通して、後に残る家族、親類に伝えてもらう。それから棺をウギヤ（すすき）で三回振

る。いよいよ入棺の時に、女性は棺のまわりに坐り、家族の者が死者の足を曲げてひもでしばる。このひもは墓内に入れる時に解く。死者を棺に入れて、ガン（龕）に納め、死者の頭が先になるようにして葬列は墓へ向う。

野辺送りをダビと称し、ほとんどの部落民が参加するが女性達は少なかった。ヤドゥウツ（墓口）を開ける前に、喪家から持参したわずかばかりの米を左手で三回墓口に撒く。これはヤドゥパダ（家賃）の意味でやる。それから、カド（エトの合う人）を当てて選ばれた三人の男達が墓戸を開ける。彼らは葬列に加わって皆と一緒に参加する。しかし古墓の場合には、墓口を開けるのに時間がかかるので前もって開けておく。棺は死者の足を先にして入れ、頭が墓口になるように置く。墓戸を閉じて、帰る時にはウギヤ（サン・三又ウギヤ）1本を墓口に差す。又、参加者はウギヤを左手で持って頭上で三回まわして、墓の入口に置き、これを股いでいく。これは現世との境界を意味し、死者の霊をここで止めるために行うという。

墓掃除の日は七夕の日と旧暦正月十六日であるが、七夕の日にやる家は少なく、ほとんどの家が正月十六日にやっている。龕は七年前まで使用されていたが、火葬をする家が多くなった事、部落に龕を担ぐ若者が少なくなった事、霊柩車を利用するようになった事などの理由で部落はずれの龕屋に放置されていて現在は使用されていない。以前は、部落に死者が出ると、死霊（マズムヌ）に対する恐れから女達は七日間は夜道にでなかったという。今日でもマズムヌに対する恐れは強く、墓にはめったに近づかないし行くこともないという。

### (3) 多良間島での葬送（仲筋村、塩川村）

多良間でも龕のことを（ガン）という。ガンは部落の若い者が担ぐが、居なければ誰かが担ぐ。担いだ者は葬式が終わってから、海辺で手足を洗う。ガンの寸法は幅一尺二寸高さ一尺六寸、長さ三尺八寸ないし四尺とカン（棺）同様偶数値である。

平良での葬儀屋での寸法も横三尺六寸四分と、縦一尺五寸四分、高さ一尺六寸四分の偶数値である。

### (4) 多良間島仲筋村での野辺送り

野辺送りのことをタビという。足から先に棺に入れ、足の位置を先にして棺を墓に入れる。足がないと歩けないということで、入棺も墓に入れる時も足から順に入れるという。

葬列の順序は以下の通りである。

- ① タイマツ（タズ）に火を灯して持つ（火縄）。
- ② 葬儀用の白い旗（昔は紙であったが現在では布）に経文を書く（5～6本）。
- ③ 色旗7本

- ④シオウカガニ…念佛カネ（鉦）を打ちながら歩く。
- ⑤フップラカ（龍の頭に似たもの）を3本の棒で組み、それを結んで3人で待つ。
- ⑥ガン…部落の若者が担ぐ。
- ⑦喪主…白いカンパニ（白色）を着て、こうもり傘で顔を隠す。
- ⑧パナヤ…パナヤとは位牌、香炉、ローソクをを灯すランプ、ダーグムツ（小さな餅）を入れる箱のこと。

#### (5) 多良間島塩川村での野辺送り

葬式には死者に奇数枚の服を着けさせる。野辺送りからの帰りに門口に置かれた水で参列者が手を洗う。

棺を墓に入れるとき、「誰々が来るので許して下さい」と言ってから墓口を開ける。墓を開ける人は野辺送りに参加しない。前に亡くなった人の家族の誰かが墓を開けるとか、死者の親戚と前に亡くなった人の家族と二人で開ける等の事例があった。

## 2. 宮古島の葬制用語の解説と分類

### (1) 死の予兆

死の予兆として次のことが信じられている。

- ① ガラサー（カラス）が妙な鳴き方をする場合は死の前ぶれ。これは火事の前兆でもある。
- ② 犬が十字路（ユマタ）、三叉路（ミイマタ）で円になって、その中に一匹が入り、その犬の命によって遠吠えをする時は病人が死ぬ。犬の遠吠えをユムザクイといい、死や事故ノ前ぶれ。
- ③ ウナタガタ（バッタの類）が家の中に入って裏座や南東の方向で鳴くと吉、南西の方向や仏壇で鳴くと不吉な事の前ぶれとされた。

### (2) 臨終（アマス・マーサン・スン）

死ぬこと。生命の終りを云う。彼岸（あの世）へ旅立つことで、天に昇るママス（終り）とか、カン（神）になる「カン（神）の世（ユー）へ行くこと」を云う。類する用語に「神の島・ニスマ」「フンギニヤン」「アマス」「アマサン」「カンカイナズ」「グソーに行く」「アローズマ・板島に行く」「カン（神）のスマンカイ行く」等があり、「往生スル」「旅立ちをする」「極楽へ行く」と云う用語は使わない。タビ（旅）に行くということばが海上はるかにニツジャー座に行くという用語に変化したことも古い時代用語である。

### (3) 死の確認（マーアサン）

現代では人の死について、確認することは、病院や医療機関で“死”を目にするこ

とです。死は心臓が止まって脈打たないこと、すなわち自発的呼吸が出来ないことである。死は、医学的な判定を常識として認知する。

民俗としては「本人の目の輝き」を観察して死の確認をしている。名前を呼ぶこと、身体をゆり動かすこと、地方によってはヤイト（お灸）をすることで納得したと云う。

#### (4) カヤ引き（ダキトマル）

「カチャ」と呼ばれる夜具が張られる通夜のことを云う。ダキトマルの日に徹夜で起きて死者を見守ることで、死者の周辺に寄りそって一夜をあかす。昔はトンビヤン（龍舌蘭）の糸を編んだ蚊帳である。これをカチャと云う。死者の部屋に張られて死霊が他の悪霊にさらわれない事を目的に周辺の戸を開けて外からのあかりを消して暗くする。その部屋で夜通しに「ヨトギ（夜伽）」をして、家族の人々と支者は添寝をすると云う。それがダキトマル（通夜）のことである。又、カヤを葬列に使用する場合がある。士族の葬式に遺骸を見せないために行列の左右から蚊帳の張りもので隠すということがある。この儀礼は一部の士族に伝えられた。

#### (5) ミヤコバスキミズ（別れ水）

スディ水、バッシイ水、いずれも死者に沐浴させる浴せ水のことである。ミヤコはこの世のこと、現世のこと「宮古世」と呼ぶ。バスキとは別れる水の意味で、再生への儀礼である。水は一般にシニミズといい、ウマリ井（カー）や聖地にある水（井戸水）を最初は使用したという。狩俣ではイスガー、島尻ではニッダーの井、又はンマリガー（生れ井戸）から汲んできた水を最初にあびせる。その後、井戸（屋敷にある井戸）や水道の使用に変わった。

#### (6) ユンナキ・ナキユン（読むような流れ歌で泣くこと）

ナキユン（泣き読む）とも称される。泣き歌である。トウツキ（通し）ということばにあるように、死者の別れの時、泣き叫ぶがごとく、またしのび泣く如く、うたい語り、魂よばいをする。タマシイを呼びおこす、バカーリと再生（スデル）のために泣きよむことである。故人の名前を童名で呼びかけ「ンゾナムン（無蔵）」「ンゾウサー」「生きかえりよ！」「ナウティガ」「ナウティガユー」「カンヌナリユー」「マウヴァリフィサマチユー」とトウツキ（言上・口上）する。泣きことばが死者をかこんで長い間の物語を揺り出す。挽歌の世界を観るようである。

#### (7) ソーシキクミアイ（葬式組合）

葬送の儀式はすべて当家と関係ある血縁者いわゆるウトウザや知人（アグ）を中心にして交際のある人々、近隣の家より一人や、里や村から各々一人ずつ出て装具作りや葬列に参加する。

ソーシキクミアイは、昔はユイマールの関係で装具を手づくりしたり、材料を提供

したり、食物を運んで参加するユイの人々にふるまった。又、主として道具を提供したり、ガンヤーに出向いてガン一式を用意し墓地まで運搬した。主に里の若者がそれにならずさわった。

(8) ソウギヤ（葬儀屋）

戦前より葬式道具の棺や旗、前机、白位牌や葬儀道具を売り、又製作する、葬儀屋があり、市内に工場をつくっている。作業は家族と一緒に共同作業をたてまえとしていた。いわゆる昔は、作業所と住宅とは一緒であった。現在は、会社システムになって「公益社」などの形式をとった企業になってきている。本土化への移行とサービス化が格一化してくる。

(9) ガンヌヤー（龕の納屋）

龕を納めて保管する納屋のことをガンヌヤーと呼ぶ。龕は4名で担ぐために代りの若者も加えて、葬儀の当日の朝に酒、線香、洗米を持って借りに行く。昭和48年代ごろから、霊柩車の出現と共に姿を消していった。

(10) ガン・ピンザ（龕飾りの一種）

四法印を書いた旗をオーズと呼ぶ。メイキという故人の名前を書いた旗をセットにして、一本一本の旗をつるし飾る棒を云う。頭部に旗掛けがあり、その上に龍頭の彫りものがある、大変に荘厳であった。オーズをつるし葬列の先頭に立つ棒のことである。

(11) ツト（土産品）

死者が持つ後生（グショウ）への土産品のこと。あの世へ持たす土産品のことである。タバコ、タオル（白色）、ハンカチ（白色）、針と糸、ウチカビ（紙銭）など、所持品としてでなく、あくまでも土産として先祖に分け与えることの出来るものである。久貝・松原では、サージ（白布）に贈る相手の名前などを書いて棺に入れた。家族や親族、友人などが為す。

(12) みやげもの（ツト）の種類

- ① 白い手ぬぐい、ハンカチとピズ（針）
- ② タバコとハンカチとウチカビ（紙銭）
- ③ 茶の葉、みそ、花米、物種子（ムスダニ）、打紙と酒、ザカナ
- ④ 下着と上着、靴下など着物の下着

(13) ピズ（針とタオル）

針のこと。これで後生の水をとると云う。後世への旅立ちの白装束（グソーキン）、神着（カンギン）、神羽（カンパニ）のソデに差し込んで数本持たす。久松部落では、サズに差し込んでツトとして先祖に持たす。タバコ（ハイトーン、セブンスター）な

どをツトに用いる場合が多く、先祖の数だけタバコを持たした。その中に針（ピズ）を差し入れたりする（松原村昭和60年代）。

針と水で食べ物の交換に使った。針はその代金であり、それ故に大事な祖先への贈り物であるといわれる。糸をつけて白サズ（手ぬぐい）に差し込む。白紙で包んで土産主の名前を書く。副葬品の一つでもある。

(14) ムヌダニ（種子包み）

五穀（主として粟・麦・米・大豆）を種子（サニ）として白紙に包み、三角形に折りまげて死者のフトコロ（バタフクル）に入れる。また、佛の種子（サニ）の卍字を書いてもらい、後世（グショウ）にて畑作をする種子として使用されるようにと云って入れておく。

(15) 六道銭（グソージン）

後世に行って使用するお金（ジン）のことで、アカジン（銅銭・十円ジン）を幾枚か紙に包んで棺に入れる。今日では、白着物（カンパニ）と共に銭入れがセットになって葬儀屋から買い求める。カンパニ（白着物）は一枚を着せて、前ひもむすびで棺に寝かす。グソージンはカミジンとって、紙銭の束になった。ウチカビがグソーでの金に代わったのである。

(16) パナ（飾り花・造花）

飾り花のこと。葬送用具の品目で荘厳品の一つである。昔は葬式の当日に里の人々が葬式に使う造花を一对、家の祭壇に飾る造花を一对、計4個の花づくりをする。造花は「シロバナ」「イロバナ」とも呼ぶ一对の飾り花で、色紙を用いて蓮華を一对、前机用に置く。白い蓮華は、和紙を用いてつくる。色花は、赤色、青色を混ぜて銀花を加えて製作する。花台は、バショウやクワズイモ、アダンの茎根を切り、円台の形に差し込んで完成する。

すべて一对、白花は葬家の仮祭壇用に供えられる。それら一式は開眼や四十九日忌（シジュウクニチ・トズミ）まで供え処理される。白花がなくなることで、開眼法事が終了したことになる（白花も色花も必ず墓地でやくことになる）。今日では花も生花が用いられる。（これまでの生花・供花は、アカバナ・クロトンを用いたが、キャーギ木の葉をその枝先をパナとして供花に用いた。）

(17) マウゴウロを寝棺の前に置く（マッフア香炉）

マウゴウロ（生前に自分自身の）守護神として供してマウダナに祭る香炉を云う）をマウ棚から下ろし、死者の枕元に置いて線香を立てる。守護神とのかかわりはこれで終了するので葬式の時は墓地に持って捨てる。マウゴウロ一式とは、香炉・ゆのみ・さかずき・マウイビ（石・トクルカンのイビ3個）のことである。

(18) カンイダシ「棺出し（出棺・ダビ）」

出棺のこと。棺は「パク」と呼ばれ、又、「カン」と云われていた。家から死体を運ぶ時棺に納めフタをする。フタをすれば納棺の終了であるので、もう決して開けぬため、釘を四方に打つ。又は棺を運びやすいように縄でしばりつける。頭部と後ろの二ヶ所に縄をつけ、縄結びを持って棺を家から出すのである。部屋から出す時は東から出さず、下方である二番座の出入口を使う。雨戸をはずして、広い出口を用意する。当日は床の間で黒幕を張って祭壇をつくるわけで、死者は玄関から、多くの男衆の手でかつがれて出棺される。黒幕を使用したり、白紙を縁起物にはりつけ、塩水のタライを出す。塩での魔よけの呪術儀礼は昭和60年の時代をすぎて一般化されてきた。

(19) 一家よりの棺出し、葬式が続く場合

墓が共同墓地で寄合の場合、同じ日に一軒から葬儀を出した場合、年齢の高い順次に墓に納めていく。二つあるということは三つもあると云って不吉とした。今日では、出棺の時棺に納めた引き物で不幸を回避する。

(20) 死者へのフツ（口）、トナエゴト（念佛）、トナエゴト（ユタ等）神フツ、スングイ

ここでのフツは、クチ（口）と表記し、声（クイ）である。死者の魂を呼び出し、生きかえすこと。再生する魂への声かけをいう。念佛とは「成佛」を祈願することである。稱名（ナムアミダブツ）ではない「トナエゴト」とも呼んで良い。

「カンナウドウズ、タスキフィサマチ」、「ミヤークミチバカーリヨー」いずれも、最初のことばが多く使われた。

「成佛して下さい」、「神佛（カミポトキ）になりなさい」いずれもこのように口を出した。

以上のトナエゴトを神フツと呼んでいる。

(21) ダビワー（プニシャブリ）

ダビワーとは、葬式に供養される豚のこと。ダビに行く、葬式に行く、参加するなど関連用語がある。

昔、「プニシャブリガ行カウ」と云って、豚汁や三枚肉を食べることをそのように表現していた。葬家を「ダビヤー」と呼び、葬式から帰る時は、海水で直接足を洗います。同じ道を通らない。頭上にアダンの葉でつくったサンをまわす。会葬者はサン（拂うもの）を廻して帰る。豚便所で豚を泣かして行く便所から二番座のウラ部屋から入る。必して東座敷から入ることを禁忌とする。御嶽には入らない。村の大きい御嶽には通らない。物品の貸し借りをしない。以上のタブーがあった。積極的なヤフ（厄）よけがあった。これらの事実の伝承でガニバリズムの思想（信仰）があったと考える説もある。



(22) テラ（寺）イキ

宮古島での葬式は、大方が佛式で行っている。寺へ通知する人のことをテライキと呼んでいる。寺に葬式をたのみに行くと云って必ず二人が選ばれて行く。寺や通知にかかわる公的などところでの往事は、必ず二名が受け負うのである。

(23) ダビ（茶毘）—葬式（葬儀）

本来の意味は火葬の形式をさして言われるものであり、梵語（サンスクリット語）の音訳から来たものである。宮古島では、ダビは葬儀式のすべてにわたってことばが使われている用語である。

ダビワ—とは、葬式に供養される豚のことで、ダビに行く、葬式に行く、参加するなど関連用語がある。

ダビとは、死者を墓地へ埋葬納骨し、葬式を出した家に帰って、豚汁やニギリメシ、豚肉のウサイを食することを風俗とした時代もあり、今日そのなごりもみられる村もある。

(24) 葬式行列（ダビに行く）

①トラ（ガンピンザー）、

②メイキ（死者の名前を書いた白布）

③四流旗

④ガン（コウ）部落共有の一式。

⑤血縁者、身近な長老から先にならぶ。親族、友人。

⑥部落の人より一人は必ず出る。今は里や班のうちより一人が参加する。

ガンを担ぐ役目は村の若い青年がうけもった。それを6名の若者が担ぎ初め交代しながら墓地へ運ぶといわれる。死者と同年齢の人はかつがない。ユーサガイと云って前に2名、後方に2名が肩口にかけて持つ。交代の時はガンを地面に降ろさない。

(25) ユーサガイ（棺箱かつぎ）

ガン（龕）の使えない葬式の場合、又、龕の入らない山路を登ったりする時、棺の前後を縄でしばり、長い棒を通して二人で担ぐことを云う。ユウサは「ぶらんこ」のことを称しているので、ユウサの如く担ぎ運んだと云う意味である。

(26) ピキムン（引き物）（サルの日）

死者への供儀の儀礼で「引いていくもの」を象徴とした。死者に寄りつく悪霊（マズムン）としてトリ、鳥（生きたままの鶏）バツタ（カタ）・人形などが用いられている。トリは鶏が多く、友引、生れ日でトイの悪い日、サルの日など、又、一年間に同じ家から二度も葬式を出さないためにピキムンを使用する。トリは足をしばって生きたまま墓庭へ持っていき、そこで放つ。バツタは死霊の使いといってその足を糸で

しぱり生きてまま墓へつれていく。一軒の家から続いて二人の葬式が連続してある時、人形が持たされる。人形はピキムンとして墓の中に柩と共に置かれる。

(27) オーズ（葬式旗の総称）

葬式旗のこと。5枚、7枚、9枚の布旗・色旗（紙や布でつくる）などがある。オーズとは、長い経文の書かれた布旗のことである。その他佛諸行無常「寶寂滅為樂」の経文が白2枚、赤と青の各一枚ごとで計5枚が書かれ旗となって下げる。竹や枝木、ダテフ（ダンチク的一种で、カヤの葉を竹棹に用いる。）その他、赤一枚、青一枚が加わって計7枚、「一路入涅槃」「南無阿弥陀仏」の佛名号を記する布旗もあった。

又、オーズは今日では葬儀社が作っているが、昔は白紙や色紙を長くつないで用いた。布は使い終ればフルマス（開眼）するときもらいうけて、種子入れやその他の袋物に作り直して利用した。また、海人（ウミンチュ）はサナギ（禪）に使うと厄除けになるといっている。

(28) 名記旗（メイキバタ、ナーバタ）

メイキバタ（名記旗）、ナーバタ・故人の名を書く旗である。旗持ちの始まりは長老者の年齢順次で持たれる。「故○○○○之柩」という文字が書かれた白旗をメイキバタという。オーズの中で大切なものである。寺で書いてもらうものである。名記旗は2メートルの長さで一番長く、字も大きく書かれ故人の名を記して葬列の先達になっている。名旗の次には「佛法僧寶」の四法印がつづく。「佛諸行無常（白旗）」、「法是生滅法」（白布）、「僧生滅々已」（赤布）、「寶寂滅為樂」（赤布）がある。その他「帰命十方佛」、「南無阿弥陀佛（白布）」などが書かれた。オーズ（布旗）は近来青竹（2～3m）の用意がなされるが、持物を田舎では竹に吊したりして用いた。この四流旗は焼いて処理する。

(29) トウル、トウラ（灯明）

四角の灯明に白紙をはり、白色の細長い細紙をたらしてさげ、飾りトウラにする。（竹棹）ガンピンザに又は竹棹に二本さげて、墓の左右に置く。前机屋に置く灯明（トウラ、トウミヨウ）も一対ある。吊さげ灯明ではない。

(30) マイヅクイ、マイジクヤー（前机）（前机屋）

墓口の前に置かれて、香炉（ユウロ）、位牌（イパイ）、湯呑（ユヌミ）酒器など、白花・灯明などを安置する木箱や屋形前机がある。古くは、木箱のままを代用した。今日では葬儀屋が専門に製造している。

前机（マイジクヤー）の下には、白い紙又は布で巻いた鼻緒の下駄とぞうりが並べられて置かれる。水カメと水サシ（ひしゃく）が横に置かれてあって、毎朝水が使われたり、入れられたりする。

(31) ダークムツ (団子モチ、後世団子)

団子のこと。後世団子のこと。イモや米で作り、7個・9個と奇数を人皿に盛って死者の枕元供える。必ず一対供える。前机に酒・茶水と共に並べ飾られる。ダークムツとも呼ばれることがある。煮芋(シムイモ、ごはん)と小麦粉を混ぜ合わせて、団子をつくる「ダークムツ」、「ダーク」が古い姿である。念回忌や佛事など、ユタが願いをするときにも49個つくられる。プニムツとは異なるので注意が必要。供えてのち、家屋外や墓地、門前に出されて捨てられる。

(32) パナ (白パナ、色パナ) 造花

飾り花のこと。葬送用具の一つで荘厳品の一つである。昔は葬式の当日に里の人々が葬式に使う造花を一対、計4個の花づくりをする。造花は「シロパナ」「イロパナ」とも呼ぶ一対の飾り花で、色紙を用いて蓮華花(パナ)を一対、前机用に置く。白い蓮華花(パナ)は和紙を用いてつくる。色花は、赤色、青色を混ぜて銀花を加えて製作する。花台は、バショウの根やクワズイモ、アダンの根を切り、円台の形に差し込んで完成する。すべて一対、白花は家庭の祭壇用であるので、開眼や49日忌まで供え処理される。白花がなくなることで、開眼法事が終了したことになる。(白花も色花も必ず墓地でもやす) 今日では生花、イヌマキ、クロトシロなど、花器に生けられて一対供えられている。

(33) シロイパイ (白位牌)

故人の法名、又は俗名(生前の氏名)を書いた位牌のこと。白紙で位牌を包みはりつけるので白位牌と称した。

一本は墓地の入口に、前机(マイズクイ)の中に安置し、もう一本は家の佛壇の下にある仮祭壇に安置して拝まされる。いずれも葬儀屋から持参されるものである。

(34) タカゼン・タカブン (高膳)

高膳のこと、年長者への日々の膳である。近來まで埋葬風習があった時、八十歳以上の老人(ウイピトゥ)に使用した、一人用の高い供膳・御膳を墓地へ持参し、故人の生前に使用した食器茶わん、ゆのみ、酒入れ、きうすなど一切を揃えて持たしていた。墓庭に並べてこれを持って後世で食事をして下さいと云って置いた。老人に満たない人は平たい膳や茶盆に揃えて持たしていた。

(35) シンモツダイ (進物台・供膳のこと)

墓に納められ、死後の食物(米の盛り合わせ)を供えて、墓中、棺前(頭の方位)に置かれる木で作った盆である。四方形に白紙をはる。

狩俣では、米を持ち寄って「後世のパンマイ」と云うて墓に入れる。市内や地方では、出棺までに供えた枕めし、おかず・ごはんなどをすべて一括に集めて「シンモツ

台」に供えるツト（みやげ置き）にもなる場合がある。

(36) グシャン（後生枝）

杖のことを示し、後世に旅立つ時、持参するものとしてグシャンが供えられたり、墓前に副葬品として持たされる。3本、7本、9本と使用した手杖（グシャン）を加えて竹や木枝を切り取ってその外まわりを白い紙で巻きつける。昔はこの杖をして不足なく旅をしたと云われている。一本一本杖と杖のまわりを白紙や白布で巻きあげて造った。昔、下地町の与那覇村や上野村、川満村では老人、若人にかぎらず青竹でグシャンと生竹を割って作った笠（カサ）をそれぞれひもで結びつけ、グシャンとして葬式道具の一つに加えて持たすのである。これらの道具は一人が葬式（ダビ）の日に故人の庭で製作していた。

(37) サナ（傘）、クバガサ（雨傘）

葬送用具の一つ。昔は、グシャン（杖）と対をなして青竹を割り、白い紙を張って「綱代笠（クバガサ、カサ）を作っている。今日では、杖は持たずにカサも雨傘を代用する。本来の日よけの黒傘を遺骨の収骨時や納骨時に使用する。旅から遺骨が来ると、沖縄本島や八重山本島、本土からの遺骨を墓地に納骨する時に黒ガサを使って日よけをし、又、人々の目にふれさせないようにするために用いるのである。墓地に置いてグシャン代用とすると云う。終了である開眼の場合、カサをもやす場合が多い。葬送時のカサの行事は、沖縄本島の葬儀社が持たして普及した。

(38) アダンバサバ（ゾウリのこと）

故人が墓より出入りするため、その通行の往来をする下駄やゾウリなどが一対に供えられる。サバと下駄の新品の揃えであるが、生前に使用したサバ（ゾウリ）なども使用したりする。青竹につるして飾る。サバのそばには、グシャン6本又は一本、綱笠一個、アダンバサバ一個といずれも白紙をはる。現在は故人の生前愛用の靴、下駄、ゾウリが置かれている。

(39) タグ（水桶）、サシ（ひしゃく）

「水まつり」のことである。墓参りを代表としてミズマツリに行くとも云う。のみ水を井戸からくんできて、それをタゴ（折のこと）かバケツで墓まで運び、墓の入口近くにある水ガメに入れておく。水ガメより墓の供物入れにそそいだり、生花や墓の入口に水を掛けしたりする。池間島では、死者の持ち物として使用していた水ガメの大きなものを運んでおく。死者にとって水供養が一番大事なものと信仰されている。朝、夕二回、井戸より汲んだ水を供えたすのである。

死者が異常死の場合も、水ガメにいっぱいの水を入れて運び供えて、引き上げてくる。以後、墓参りはしないで捨ておく。今日では、プラスチックのバケツや、小さな

水桶に飲み水を入れ、ひしゃくで墓の入口近くにかけて終了する水まつりになっている。ツボ、タグ（水桶）に変化した。

(40) ピーナワ（火縄）、タズ（タイマツ）

マカヤの束を縄で強くしばり、タイマツをつくる。火縄のように火種子（タネ）が消えない。家から火をタズにつけて墓へ持っていったり墓で火をつけて、タイマツの火柱子をもらって線香をたく。火をもらうためのタイマツである。一日に一本、墓まわりの時一束使い、帰りは火をおこして置いておく。死者はこのタズを数えて墓まわりの日数をかぜたという。松ヤニを持つトボス（ヤニ）の木片を持つことはまれである。水柱子はワラ束よりカヤタバのタイマツを用いた。

(41) 竹竿（タケサオ・サオ）

四流旗を吊し、昇り旗をつくって持つ。ダンチク、ダディフなどから用いられた。今日でも必ず吊されて墓前に供えられている。

(42) テンガイ、テンゲー（天蓋）

佛を日の暑さから守る上からのかぶるもの。被る網かさのこと云う。葬列に持ち歩いた。今日では、天蓋は見ることが出来ない。早く消えてしまった。

(43) シオウカガニ（鉦・念佛鉦）

以前は、シオウカガニ（ニンブチガニ）を、葬式の日にはダビヤー（葬式を出す家）の庭で盛んに打ち鳴らし、葬式のあることを知らせた。又、葬列の一番最後の人物が鉦を鳴らしていたという伝えもある（砂川玄孝氏・昭和50年代）。打ち鳴らす人はやとわれていた身分の低い人達だと云う。

(44) カンブクロ（棺袋）

棺袋。かぶせ布（白布・のちに棺袋）。白い布を棺の上から掛け霊柩車に入れる。カンブクロは、あらかじめ作られている。以前は毛布白シートなどが代用された。

(45) ウッフャ（風呂敷）

葬列に参加する女性達はすべて頭からウッフャと呼ばれる風呂敷をかぶり、頭額を被り顔をみせなかった。ウッフャからティサズ（手ぬぐい）になり、白いタオルを被って葬列を見送る。又、参加する女性は後列になって顔をおおったりした。女性はすべて、サズを被る風習は近年まで続いている。女性が神事や祭りに参加する時、テヌグイ（テーサジ）を頭に被るのである。聖地に入る時もそうである。

(46) マッファ木（枕木）

墓の中に棺を入れる時、コロのように丸木を棺の幅に切り取って二本置き納棺をする。棺を安置する時に置く丸太木である。サスカ（棺置台）の代用品に代わった。

(47) ナイパ（ツボヤ焼きの皿、深鉢のこと）

棺を墓中に納めるとき、墓の中に深鉢四皿をナイパーと呼んで棺置き台として置く。その鉢上に水を入れ「サスカ」という棺を安置する台に置く。

(48) ムトウ（元・墓地）

墓地、葬り場所で主として共同墓地、村墓地、家族墓地を指す。拝所やウタキ（御嶽）もムトウと呼ぶ。ここでのムトウは、血縁をひくとして持つサニ系の子孫が墓地を利用するとき、先祖のムトウと云った。

(49) 共同墓地の開けかた その①

墓の入口の開き方のことで、地方によって伝承が異なる。古くはユライズ、ユリヤー（寄合墓）と呼ばれる共同墓の入口は、石や土でふさがれたり、コンクリートの組み合わせ、切り石の組み合わせで閉じられている。常日その墓地に納骨したり、葬式を行い、墓地に棺箱を入れる時、勝手に手を出すことはない。その日のエト（生れ年）にあたる人は、墓の開け閉めに係わらない墓の開閉には、タブーが多い。トイの合う人が選ばれ（身内から）案内してフタ石に手をかける。石の組み合わせでできている墓口は、背を墓に向けて後ろ向きで左手にて墓石を手づかみで取る。その後、誰かれとなく塩で身を清めながら収骨作業をする。

・コンクリートの墓の入口では後背で合図する。

・左手でうしろをむき、墓石を一つ二つ取っておとす。そのあとは誰がとっても良い。

(50) 共同墓地の開け方 その②

墓地葬式のある日、これに先だって清掃したり、墓口（パカムツ、ヤドフツ）を開く。墓地の入口の開閉とは、里や親族一門（ウトジャ）の男性が協力する。墓庭の草取り道の清掃には、事前に前に入った家族が早々に集まり、トイ（エト）のあたる者で、たとえば一例をあげるとトラ歳の人のクサテウシ年生まれの人によって、始めて手をかけられる。塩や酒、洗い米による清めで墓のふた石を取り除いて、墓口からは後ろ向きに入り、前向きで出る方法をとって、墓中の内室の整理、墓の入口近くにある棺箱や遺骨を後方などに移転安置する。その後、当事者である葬儀式を迎えトイのあう人、長子、いずれかの男の子幾人かが開いた口より後ろ向きに入り、最終に遺骨の安置をする。墓に納棺する棺桶の場合は、墓口に頭部をを前に足を奥にむけて納棺する。遺骨は柵に順次し（年齢の高い方から）中心に左手から安置して左勝手を上位として納骨する。

(51) ナチャーミイ（翌日墓参り）

葬式を終えて、翌日早朝に家族、親戚、知人達が茶湯、線香、水、パナ（クロトン、作物の芯）などを持参して墓参りをする。

七日は、重箱（モチの重箱、菓子類、おかずの重箱）がかざられ、紙銭がやかれる。お膳にメシ、汁、ウサイを供える。ミソ・塩も供える。トジメ（開眼）狩俣では、「ママー」（死して三日目）の日まで朝、夕毎日墓参りをする。家では三度の食事を供える。ナチャーミイは、死者の顔をみると云う意味でなく、翌日の墓参りのことを云うようになった。

(52) もふく（喪服）

葬式の時に着る黒い衣服（いふく）のこと。男は黒い背広で黒ネクタイ、白いワイシャツ、女性は黒色の着物か黒のレース、ワンピースなどアクセサリーとして、黒のバックにパールという具合に輝きのある色物をさけて、黒色一つで統一してつける。ここ20年来、告別式に参加するようになった。外から入った流行である。

(53) カーウリ（水くみ）（儀礼）

海浜、海岸に降りることでミソギ（ソーズ）をするために、海水に足をつけたり、波のパナ（華）を身にかけたり、足を洗ったりする。ナミ（波）のパナ（先端、華のこと）は、海岸へ打ち寄せる白波のことで、海水のことを云う。今日では、家の門に塩水をタライや洗面器に塩水を入れて出しておく。家に入る時、この水で清めする。

(54) 水供養（ミズマツリ）

「水まつり」のことである。墓参りを代表としてミズマツリに行くとも云う。飲み水を井戸からくんで、それをタグ（木桶のこと）かバケツで墓まで運び、墓の入口近くにある水ガメに入れておく。毎朝・夕に水ガメから汲み出して墓の供物入れにそそいだり、生花や墓の入口に水を掛けしたりする。池間島では、死者が生活用具として使用していた水ガメの大きなものを運んでおく。死者にとって水供養が一番大事なものと信仰されている。朝、夕二回、井戸より汲んだ水を供えた。

死者が異常死の場合も、水ガメにいっぱいの水を入れて運び供える。以後、墓参りはしない。今日では、プラスチックのバケツや、小さな水桶に飲み水を入れ、ひしゃくで墓の入口近くにかけて終了する水まつりになっている。ツボ、タグ（水桶）に変化した。

(55) ショウジンバレ（清掃バレー・精進バレー）

「精進」あげ、「忌」あげ、「晴れの日」のことである。死後49日忌を一般にショウジンバレ、ショウジンバレーと称するが、7日目及び7日を7回する。49回忌の間に「カイゲン」と呼ぶ開眼法要を行う。「フルマス」「カギクナス」と同じく「イミイズアケ」（忌明け）と同義語である。先祖になる、一緒になる、成佛することに解釈する。ショウジンという不浄の浄化作用、そして忌れに服すということは、靈魂を慰めることに一族が服し、生活を精進することである。「イミズアケ」のことをショウウ

ジンバレと呼ぶ。ハレ（晴）の儀式に参加可能な様子を称することを広い意味では使われている。神かかりや、司、神女、ユタと呼ばれる女性は人に依って異なるがブソーズのソーズバリを百日目または3年間も経て行く。

(56) カンピトウバカーズ（神人の別れ）

カム（神）＝先祖と人間とのバカーズ（別れ）のことを云う。死んだ人の魂が生きた人間や生霊に祟りをおよぼすことをおそれ、生きた人の魂を墓や死者の魂から離して別れの儀式をする。宮古からのバカーズで、此の世の道を後にして、反対の死後のカム（先祖）の道、死者の行く道を歩みなさいとトウツキル（云いつける）ことである。バカーズはカムの道と人の道を分離して「道分け」を願う。これはカム願いの一つであり、そこで死霊の神の道に入り、成佛して迷わず、先祖神へと昇化するコーことを云う。人間は死霊により分離されて、守られる立場に入ることを「神人バカーズ」と呼んだりした。また人間ととい分（エト分れ）といって神と人の道分け分「バカーズ」とも云った。これらの儀礼は昔は、家ザスやユタの職分であったが、今日では、開眼焼香に経をいただいて「成佛」として云っている。

(57) ミカドブドキニガイ（3日解）（儀礼）

亡くなった日から数えて3日目。供え物はカマボコ、豆腐、魚である。墓参りは午前7時頃である。死者の使用した着物、筵等を海に持って行って捨てた。しかし立派なものは残して家族が使用した。ミカド・カドヌピトウ（三日ブドキ）のことを「ミーズヴェ」ともいう。その日は供え物に使う魚を取るため漁にでかけたり、家に残って家のまわりに落ちた葉を棒でつつきながらまわったりする。それからニヌパ（北の方角）の土とウマヌパ（南の方角）の土を移し変える。死者の服を浜辺で洗うとき、ヤラブの木を立てて右側から下りて左側からあがってくる。

(58) 三日バカーズ（ミッカバカーズ）

死した魂が3日目に墓より帰るということで、3日目の墓参りは盛大にした。家では、シウコウをする。この日の墓参りは一度だけで、身内は重箱、打紙パンマイを持参する。にぎりめし（イズー）と塩（マース）又はみそを墓参りする人々に分けあって共食する。持参した飾り物（重箱やにぎりめし）は持ち帰らないと云われている。

(59) パツナンカ（初7日）

パツとは初めの意味で、初めのナンカということである。

※シンジュークニチ（49日忌）…親戚の者が餅などを持ち寄ってやって来る。

※ピャークニチ（百日目の法事）（マンサン、ムムカシウコウ、バカーリブン）

※1年忌（ユヌウーイ）一年目の命日シウコウとも云う

※3年忌（ミィティ）三年目の命日のことで死去した年も1年目と数える



※7年忌（ナナテイ）

※13年忌（トウティミイテイ）シウコウ、イミイシウコウ（法事）の大きなもの

※25年忌（ニジュウゴカイキ、ニジュウゴネンキ）

※33年忌（サンジュウサンカイキ、ウブシウコウ）

(60) 開眼（かいげん）ーカギクナス・ミダマプラカス・プトキザー

開眼とは、カンビメバカーズとか、49日忌のバカーズとか、ソーズバリとか稱されて忌明けの意味を持っている。自位牌が先祖の位牌に代わり、祭壇や忌みがソーズ（ハレル）日なのである。開眼とは、故人が佛となるために入魂（たましいごめ）する儀式を云う。カム・佛に成り、墓前の供花、飾り物、前机等を焼いてカギフナス（帰元）にすることである。和魂は入魂（タマシウカビ）の意味で、入魂すれば仮棚にある祭壇の飾り花や白いものは一切これを焼きすてる。佛壇は、古くはマウタナと呼ぶが、今日では、タンス式佛壇、位牌を中央にして拝む祭壇のことを、佛壇と云っている。

(61) 開眼（かいげん）法要に用意するもの

開眼の日取は、家族の都合で日取りして良いとされている。長子や家族のトイ（生まれエト）に依って生れ日や友引はさける人もいるが、それはそれとして良策を考え、日取り、時間や墓のソージ（掃除）など相談する。

- 開眼の日にはまず位牌を新しく用意する。（イパイをミイガイラス）
- 供え物ー果物類（りんご・みかん・ばなな・なし・ぶどう・いちごその他）白もち・あんもち・お菓子コーガシ（粉菓子）・こんぺん（米餅）・洗米・塩・茶湯・水・酒（アワモリ）などを供える。その他、地元のパパイヤ・スイカ・トマトなど供え、さらに、食事の四つ膳（供膳）をそろえて開眼の法事をする。

(62) 墓のソージ（トウズミ）（ソーズバリ）（開眼ことなど）

開眼の日、49日忌開眼の日（ソーズバリ）墓地の飾りを一切に焼き拂いカギフナス（きれいにする）ことをします。この日、家では49個のプニムツ（餅）を参拝者と親族が分けあって食べる「食いわかれ」をする。死者の日常品の形見分け、供花の整理をする。

(63) ミズマツリ

死んだ日より三日目が「ミッカシウコウ」と云い、バツ七日（初七日）をこえて、九日目（ククヌカ）のソーズバリをする。墓で家族が焼香して供え物をおさげして、共に食事をする。ミズマツリは墓に水を持参して、墓口や飾り花の根元に水をかけることを云う。ソーズバリとは、この世からの別れで、「神の島を自分でさがしなさい」と云うことである。

(64) ギバンムンの死

昔々、キバンムヌ（貧しい人）身寄りがないので近隣者が供出して、棺に納めて、ユーリヤーズ（寄合墓地）墓に入れた。この寄合墓地は自然の洞窟でそこに葬って拝みをしていない。神の世界へ積極的に行く道具もほとんどない。

(65) 盆中の死（キジャイ・ストウガツ期間の死者儀礼・葬送）

葬式は翌日に出す。当日はさける。自位牌は三日間は白い布で被って「お参り」しない（佛壇を閉める）。墓には身近な人で行く。迎え日なら、夕方までに埋葬して、盆あけより墓参りする。今日では、火葬のみを身内で行い墓に入れなくて家の仮祭壇に安骨しておく。後日告別式をして納骨する。

(66) 水死人（キガズン）

海や沼で死したる人をキガズンと稱し、遺体は浜から舐んで棺箱に入れて仮墓地に葬った。キガズン墓地は村に必ず一つ、二つあった。この墓地は昔は、マズムンの墓地として近づくことをしなかった。本墓に改装したり、入れたりする風習は近来この方である。

(67) パラミミドン（妊娠した女性）

腹の大きくなった女性「妊婦」の云う。葬式にかわり、次の妊婦とその夫のタブーがある。今日では気にとめていない。

①死者に直接ふれてはいけない

②葬式に参加しない（本人）、行列に参加しない

妊婦の夫の参加はさけたほうがよい

③妊婦の夫は棺にふれないほうが良い。（妻は出席しない）

墓に行っても棺や墓口を開閉することにはたずさわらない。死者の水あびせをしない。

④葬式の時、棺をかつがない。葬式をタブーとする。（夫と妻のみ）

以上が不浄なものに接しないことを積極的に云っている。

(68) プニムツ（骨餅）・（シジュウクニチのモチ）

49日忌は人間の体が49個のプニ（骨）で成り立つので「プニムツ」をつくります。

49個はタマスの数と云われます。このモチは、長子より順次にまわして一人一個のモチを食べて別れをします。「君は神の道を行く、私は人間の道を行くから」

(69) ヤラビカンの葬り方（埋葬法）

龕を使い葬儀を出す年齢は10歳未満になる子供で、直接棺箱に入れ、ワラ縄やカヤ縄（バナ）で結び（釘を打たない）ユウサガイという担ぎ運びで墓地へはこんで行く。

村によっては、子供だけを葬る「ヤラビバカ」、「ムト」、「仮バカ」などがあって、共同墓地や家墓地に入れられない場合がある。

#### (70) 経札 (キョウサツ)

死者の顔に被せる白いテサジのこと。手ぬぐいの長さの白い布を寺院経文 (キョウサツ) を書いてもらいお経を納め、それを持参して葬式をした。主として離島の人が死んだ時、やむを得ない状況があった時に葬家の使いの人が経札を書いてお経をあげてもらう。テサジ (手布) に書く経文は佛名号を中央に配して書く。その他の経文には書式があつてここでは記録しない。

#### (71) 葬式 (特殊葬法) について

水死人、キガズンのこと。海や川で溺れた人。水死者について「大和では福神 (エビス神) として大切にされたが、当地ではキガズンに入り、遺体は家に運ばれず直接柩、または戸板に乗せられて墓まで運び、そこで棺箱に入れて墓に納める。主として仮墓地が多い。遺体のあがらない時は、海岸よりタマスウカビをして、小石を拾つて来る。このタマスカビは墓の横に置かれたが、今では墓地の内室に棺を置く場所に入れておく。リウグニガイをすると云う。

#### (72) 変死・キガズン (異常死、自殺者の死)

首つり自殺者の場合、始めにその現場の樹木の枝を切る、代わりに、ニワトリの首をつるし殺して現場で厄拂いする。

首をつる場所が鴨居の場合、そのカモイを切り取るか代替えをする。死体は変死体として、馬小屋のような納屋又は、現場より棺に入れて墓地へ運ぶ。ユウサガイといって龕を使わない。その日で墓拝をやめる。次の月より墓参りはやらない。不吉とする。

#### (73) ピキムン (引き物) (サルの日)

死者への供儀の儀礼で「引いていくもの」を象徴とした。死者に寄りつく悪霊 (マズムン) としてトリ、鳥 (生きたままの鶏) バッタ (カタ) ・人形などが用いられている。トリは鶏が多く、友引、生れ日でトイの悪い日、サルの日など、又、一年間に同じ家から二度も葬式を出さないためにピキムンを使用する。トリは足をしばって生きたまま墓庭へ持っていき、そこで放つ。バッタは死霊の使いといってその足を糸でしばり生きたまま墓へつれていく。一軒の家から続いて二人の葬式が連続してある時、人形が持たされる。人形はピキムンとして墓の中に棺箱と共に置かれる。

#### (74) バッタ・ニワトリ・人形

同じ家より二度続いて葬儀を出す時に、上記のものを「お供するもの」として墓へ持参したりする。「ピキムン」と云う。

バッタは「ウントラガタ」とか「カタ」とも云われ、靈魂を運ぶものとして知られる。ニワトリ (鶏、野鳥) などは、魂を先導して行ったり、死霊や悪気を取り、魂の引き受けていく葬儀になる代表的なものである。人形 (ピトカタ) は、マジモノの身

代わり、替わりになって生き魂を墓中に引きこまない呪い物である。人形は、棺に入れられたり、白紙で箱をつくり、納骨の折、先に人形の箱から入れ、並んで納棺・納骨をする。二体が並んで安置される場合にその中央に並べられて三体に並列する。友引に納棺・納骨する時も使う。

(75) ガラスグー（烏小の玩具）

「トリグァー」とも呼ばれる。アダンの葉で編んだ小鳥のことである。ガラスとは「カラス」の方言名である。このアダン葉で作られた鳥は、葬送の日が悪い時に棺の上に「お供」と云って持たされた。友引の日や、「サル」のエト（トイ）の日など、あるいは長男の生まれ日の葬式の時、これを「生まれ日」と呼びならわす人々が多く、当日にアダン葉で「鳥」の形をした「引き物」を作って持参させるのである。生きた「鶏」（トリ）を生きたまま墓までつれて行く。又、「カタ」（バッタ）を棺にくくりつけ、墓に入れたりする。ピクムヌ（引き物）の一つである。ニワトリの代物は、墓地まで引きつれていくので代わりの人、悪霊がもう一人をとり込んでしまうというタブーから出来た呪術であろう。

(76) アラドコロ（他界観念）

墓地、墓場、埋葬地などをアラ（荒所）と呼び、村に墓地の集団が選ばれるが、墓地は（アラバ）、荒所（アラドクル）、墓（パカ）、塚（ツカ）と呼ばれ、その周辺や墓地、浜などの埋葬地を一般にアラドクルと云っている。「クジョウヤ」「アラバ」「グジョウマス」と呼ばれた所は、死霊の寄りつく処、祖霊の住む場所として恐れられていた。ここでは後世とは、パカ（空間）や山（丘）森・南の島（パイヌスマ）、パイギタ（南の左）、パイナガマ（南の長浜）、池間島ではアオドクル、島尻ではミヤンバリ、パイヌンミ長浜などがステドコロになる。

(77) 池間島のリウキウニガイ（<sup>リウグ</sup>龍宮ニガイ）

リウキウニガイ（ウサギ）「ヌツタイウサギ（命代の神願い）、「スウウサギニガイ」ニガイともいい、個人的な神願い。特に、個人及び身体・生命にかかわる問題、健康のウサギ願い。ウサギとは供なえ願立ですること。

リウキウニガイ（リユーキウウサギ）・（ヌツタイ、スウタスキニガイ）龍宮の神に対する祈願である。

- ①溺死体を発見した人。
- ②溺死体をかかえた人。
- ③溺れのかかっている人を助けた人。
- ④海で遭難し、奇跡的に助かった人。
- ⑤フカに襲われ助かった人。

⑥その他の命にかかわるような大きい災難にあつて助かった人。

以上の様な場合、豚を殺して神願いをする。

昔は、豚の頭は海に流した、神願いの時、四足の先端、鼻先を切り取って神に供える。この願いの時にのみ一緒にホカヌカンウサギというものをやる。漁から疲労して帰った身体を慰安してあげるの意味。

#### (78) 西原村のリウグニガイ

海神である龍宮神を祭り、願い事をする。リウグニガイは、リューキューニガイウサギとも云う。神の深い祭り願いのことを云う。個人的な神願いと共同体にかかわる村でのリウグニガイの二つに分類される。

- ① 個人の身体や健康の問題、病気の重い時救済する神願いがある。リューキューウサギ
- ② ヌツタイ、スウウサギニガイ（生命を助けられた願いでお礼の儀式）
- ③ 龍宮の神に対する祈願である。
- ④ 龍宮願いには、個人的に重い病気や事故から助けられたとき。
- ⑤ 溺死体を発見した人。
- ⑥ 溺死体をかかえて助けた人。引き上げにたずさわった人。
- ⑦ 溺れかかった水難者を助けた人。
- ⑧ 海で遭難し奇跡的に助かった人。
- ⑨ フカにおそわれ助かった人。
- ⑩ その他、命にかかわるような大きい災難にあつて助かった人。

個人的には、「生き魂」を落としたり、とられたりした人間の身体（ドウ）に魂を呼び戻し運氣を入れる。「たますうかび」をする。豚を殺してその頭や肉などを龍宮神に供えるという（供養）今日では、肉や骨などを買い求めて神司にたのみ、リウグウサギをすると云う。村のリウグ神への願いは、海上安全と大漁祈願である。

### 3. 結びにかえて一忘れられている〈ユタコトバ〉について

葬制用語の中にあるユタコトバには、葬送に関するもの、後世にかかわることば（用語）がある。結びにかえて他界観にかかわる“ことば”を記述する。

#### (1) ンミヌバン

心にかかわる想い・悩み、苦勞、悩みがしみついて離れない死者とのかかわりを離してあげる願い。装具が悪い、キガズンで気が病む、うらみをうける心配と不安、同年の友達であったことなど「ンミヌバン」と云う。

(2)ニフンブン

根をふむと云うて死霊が後世へ行き、成佛すること。極楽世界へ渡ること佛になることを云う。先祖との和合や、成佛出来ない神を和合させること云う。ワゴウニガイとも云う。

(3)フダミブン

フダムとは、根をおろすこと、祖神となる事である。ヤフダミンイ、ヤフダミヌカンとも云う。

(4)ヨウシ（養子）ブンニガイ

神の養子と云って、家をつぐ男系が無く養子が先祖を祭らねばならない時、男系が三世代にわたって欠けて養子つなぎになる家系に、養子ブンニガイをして、男系の血縁相続を実現する願い。

(5)グショウ七座（グソウニガイ）

後世とは、後の世のこと。此の世は「ミヤーク世」と呼ぶ、死と共に断絶されるべき他界—後世への往世することを云う。七つの関所のことである。もう一方では、天の七座（ナナザー）とも、龍宮七座（ナナザー）とも呼んでいる。天や後生には七つの天の空間があると考えている。

(6)帖の主（ニフンチョウ・フダミチョウ）

後世（カンヌユ）を司どる神々帖面の神・運命を記録する神、佛教で云う。“えんま大王”のこと。

(7)リウグ七座（龍宮七座）

ある水平線、天の上にある。高い所であるが、海の底ニツジャにある。龍宮という海上・海底のソコにある深い七つの座敷が七座という。他界であると観念していた。

(8)ナウンテン

天の七座と同じく、七つの天の空間（座敷）あると云う。天上他界、地下他界、海上他界（龍宮他界）がある。

(9)ニツジャー

あの世のこと、ニツリヤとも呼ぶ地方もある。ニーラとも発音する。いづれもニライ・カナイのこと。天の上、天、他界地の底であるが、通常、ニツジャーとは地底から海へ通る世界。

(10)ミグショウ（新しい後世と古い後世）

死して三年間は魂（死者）は此のミヤーク世にとどまり、屋敷や部屋から去ることないと云われた。これをミグショウし新しい年忌の考え方である。

(11)ガバグショウ (古後世)

古い年忌、三・四代の他界が時間の感覚で古いホトケと考え、13年忌の先祖、33年忌の先祖と時の長さでガバグショウを表現した。

(12)グショウティダ (後世の太陽)

あの世は此の世の空間のつづき、そのままの写しがある。太陽もあり、森もある。後世の世界に輝く太陽である。ユタの他界観念における後生プトキ (佛) 座のことを指している。

(13)ニスマ・アロージマ・パイヌ (南) スマ

シマとは集落空間のこと。ニスとは根の所 (ネドコロ・ニイヤー) で、他界、死んでいった先祖「神々の空間」の居場所である。アロウ、アラウ、アラドコロから由来した空間、後世、他界のことである。「ニスマ、シラマ」とも「アロー」とも同義語である。

(14)バカーリブン (ニガイ)

家族の一人一人との魂の執着離し願いで、死者の魂がその家族につきまとっているの、その執着を離れさす願いである。関係することばのグソーニービチは当地には無かった。

(15)ムウトウバカーリブン

願い立てのこと。夫婦であった一方の死が、もう一方の伴侶を引き込むことを離す願い。

(16)ミエーガマ・ミュー

家の便所 (フル) やくぼみのある所、特に便所のウラや深い井戸の穴をミエーと呼んでいた。魂のとられる場所で、アラドコロなのである。穴の深いアブ (洞穴) をもミエーガマともしている。

(17)オーミュー (ミューガマ)

海上はるかな水平線にあるという他界、青の他界である。

「青の他界」他界のこと。

(18)アオ、オー

青の色、海の色、空の色をアオ・オーと呼ぶ。無限大の広がりを持つ聖地である。

「水平線」「青」「地底」「あの世」等のシンボルである。青はアウト (渡海)、リーフの外にある深い海上他界のこと。

(19)ニツジャウプンツ

与那覇勢頭の豊見親が後世へ行き、生きかえったとの伝えのある墓がある。ニツジャウプナカ (平良市にあり) と云う場所が伝承のある墓地 (葬地) である。

## (20) デダガバカ (太陽の洞穴墓)

太陽の光線が直線に墓に入りこむ、射し込む墓地という。真東向きの墓地、テダンカイ (迎え) 墓である。友利元島にあるテガンカイ (迎え) 墓、成川 (万古山のテダガガマ)、来間島のテダガガマ、いずれも東向きの洞穴のことである。

## (21) 唐ンカイ墓 (トウフツ墓地)

墓地が唐 (中国の方位—西南の方位) へ向いて口を開いた墓地のこと。松原村の墓地団地より川満村への近くにある。

## (22) アカウダテミャーカ

仲宗根豊見親の母、赤宇立親を埋葬した箱式石棺のある巨石製のミャーカ。松原、久貝にミャーカ群があり、アカウダテは久貝村にある。ミャーカとは、この地では切石を整え囲いをした石積の中に、石棺 (巨石) が並べられていたりする墓地のことをいう。

## (23) アパナキミャーカ

新里の大主・御船の主の墓地。アパナキとは、空に向かってフタのされていない墓地でミャーコ (現世・この世) に生まれかえるミャーカのことである。石積みが円形状につくられた墓地のこと。蓋石にサンゴが使用されている場所が御船主のミャーカである。下地町の冽鎌にある川満大殿のミャーカと新里村のアパナキミャーカがその代表的なものである。

## 参考文献

- ・『日本民俗調査報告所集成』「九州・沖縄の民俗」 1996年 三一書房
- ・『沖縄の民俗資料』「島尻村の民俗調査」岡本恵昭 1996年 琉球政府・文化財保護委員会編
- ・『郷土』第8号 座間味島 1970年 沖縄大学学生文化協会
- ・『郷土』第9号 狩俣村 1970年 沖縄大学学生文化協会
- ・『沖縄池間民俗誌』野口武徳著 1972年 未来社
- ・『郷土』第2号 宮古高等学校 1970年 郷土研究クラブ 来間島・砂川部落
- ・『郷土』第12号 第4次宮古島調査報告書 沖縄大学
- ・『沖縄民俗』第12号 狩俣・熱田部落調査報告書
- ・『郷土』第11号 第三次宮古島調査報告書 1972年 沖縄大学学生文化協会
- ・『沖縄民俗』第24号 多良間島仲筋村 琉球大学民俗学研究会
- ・『沖縄民俗』第18号 砂川部落 琉球大学民俗学研究会
- ・『沖縄民俗』第23号 八重山石垣市宮良 1977年 琉球大学民俗研究クラブ
- ・『沖縄民俗』24号 多良間島 1986. (琉球大学民俗研究会)
- ・『平良市史』第7巻 資料編5 (民俗・歌謡) 1987年 平良市教育委員会